広島芸術学会十周年を迎えて

広島芸術学会代表委員
金田　晉

広島芸術学会が十周年を迎える。正確に言うと、最初の五年間は広島芸術学研究会、次の五年間が広島芸術学会ということになる。研究者と作家と芸術愛好家との連帯による知的集団の活動は第二ラウンドを迎えようとしている。

この十年、私たちの活動は、細部を検討するとなお克服するべき問題があるにせよ、毎年夏の大会、年四回の例会、その例会の案内状を兼ね、会員相互の交流を意図した会報の年四回の発行、学術誌「藝術研究」の年一回の刊行を一度として停滞することなく維持してきた。創立大会に山本正男美学会会長・東京芸大前学長（当時）が講演され、継続は力であると、私たちを励まされたが、その期待に私たちはよくこたえてきたはずである。

学術誌には、大会、例会での発表論文を中心に毎号五から六本の、レフェリーを受けた論文が掲載されてきた。会員は現在二三〇余名、東北から九州まで広く分布している。会費の納入率は八割をこえる。広島芸術学会に改称して以後は、法人会員制度（メセナ）を設けた。その会員は現在十七社。組織の財政的基盤も安定し、当初は次年度の収入によって学術誌の刊行経費を賄ってきたのが、現在では当該年度の予算の中で処理できるようになった。地味な学会活動（研究発表の実施と学術誌の発行）以上の、大胆な企画をする上での財政的基盤もできつつある。

これまで芸術学会が支持母体となって、美学会の全国大会、日韓学生美学会議等も挙行された。定期的な活動のほかに、広島文化デザイン会議の中の一プログラムを担当したり、広島で開催されたアジア大会においては、チャリティ方式の美術展を開催し、売上金をアジア大会に寄付した。組織は一つひとつバリアを越えて、確実にしかも多様に成長してきた。私たちは、この歩みを率直に喜びたい。

この十年、世界の体制は大きく変貌した。半世紀つづいたきた米ソの冷戦体制は終止符を打った。近代化を旗印にした、ひたすら前進、進歩の神話が崩れ、真の豊さとは何かが問われるようになった。二十一世紀

に向けて、世界は新しいパラダイムを模索している。

追憶、このもっとも美しい精神の形は時間を逆流させる。ひとは時間を、過去から未来へとすすむと思いがちである。しかし、人間の時間はむしろ未来から過去へとすすんでゆくのではないか。希望がある。その挫折としての絶望がある。決意がある。その否定形としての失意がある。愛がある。その否定形としての憎がある。これらはすべて未来という時間相におかれて現在にかぶさってくる。しかしそれらが内実を獲得してゆくためには、人は過去に眼を向けなければならない。かつてアリストテレスは『詩学』において悲劇の本質的契機としてペリペテイア（どんでん返し）とアナグノーリシス（発見）をとりあげた。オイディプースの物語は劇の最初からひたすら幸福に向かって突き進んでいるが、意想外のできごとによって逆転する。悲劇の悲劇たる真髄は、そこからはじまる。オイディプースという英雄のたどる来歴の一つひとつが、その出来事を一つ加えることによって、一貫してそれ以外の道がなかったかのように、暴き出されてくる。劇の進行は過去への進行と重なって、完結する。私たちの歴史もまたそのようなものであろう。

十年間、広島という名前にこだわってきた。ヒロシマという、今ではすっかり国際的になった悲願に色づいた片仮名書きの普遍概念をも視野に入れながら、やはり人々が生きている具体的な地域としての広島を、そこから精神の自由な功業を覗き見る、窓にしたかった。世界を見るためには、感触の確実な窓がいる、私はそう思ってきた。その窓を通してしかし私たちは世界（普遍性）を見ようとしてきた。しかもその窓を、受容器官とするのでなく、物語を紡ぎ出すポジティヴな器官としようとしてきた。

学会は研究者の閉鎖的な集団であってはならない。学会活動の成果は今後もっともっと市民に解放されてゆくであろう。特に芸術や精神の分野ではいっそうそうであろう。テオリアとプラクシス、理論と制作と演奏あるいは享受が芸術の三層をなしている。そうした世界へ、広島芸術学会はどれほど肉薄してゆけるか。

芸術学会十周年を記念して、今年は相互にリンケージする二つの企画を実施する。一つは、テオリア（理論）部門の「芸術――未来へ」と題する、芸術学の総和と展望を主題とする講演、シンポジウム、研究発表からなる企画であり、もう一つは広島芸術学会に参加する作家による芸術展示「制作と思考・一〇年の軌跡」の企画である。こうした企画が次のラウンドの出発状況となるであろうことを、私たちは期待している。新たな十年の成長を、見届けていきたい。

（かなた・すすむ　広島大学）